

## 眠りと思考

——ジャン＝リュック・ナンシーにおける思考のリズムについて<sup>1)</sup>——

Pensée et rythme chez Jean-Luc Nancy

伊藤潤一郎\*

### はじめに

哲学にとって思考が不可欠かつ重要であることはまちがいない。哲学は概念を練り上げる思考の営みであり、思考という行為そのものをも「思考とは何か」というかたちで問う自己言及的な営みでもある。哲学者の多くが、人間から思考が奪われる事態に鋭い批判を向けてきたことを思い起こしてもよいだろう。直接的にであれ間接的にであれ、あらゆる哲学者は思考について論じてきたと言っても過言ではない。思考について問わなかった哲学者を見つけることは、存在について問わなかった哲学者を探し出すことと同じくらい難しいかもしれない。しかし、哲学にとって思考がかくも重要なテーマであるとしても、人間の日常的な生を振り返れば、思考だけを問うことは片手落ちなのではないかという疑問が生じてくる。当然のことながら、人間の日々の生活は思考だけで構成されているわけではなく、食事、排泄、睡眠など、身体的・生理的な必要性からおこなわなければならない行為のくりかえしでもある。にもかかわらず、哲学や思想においてこうした行為の意義が正面から考察され始めるのは、大まかに言えば20世紀になってからにすぎない。それも、精神分析やジョルジュ・バタイユといった、いわゆる制度的な哲学の外部にある思想こそがそこでの重要な参照先となっている。それほど

\*衣笠総合研究機構プロジェクト研究員

身体の生理的機能に深く結びついた行為と哲学との相性は悪いのである。

こうした事情を踏まえたうえで、本稿では現代フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの思考論に、眠りという観点からアプローチしてみたい。1990年の『限りある思考』をはじめ、『剥ぎ取られた思考』(2001年)や『思考の取引』(2005年)など、「思考」をタイトルに冠した著作が書き継がれていることからわかるように、ナンシーにとって思考は継続的な探究の対象だった。また、それと時を同じくして、1990年代初頭に受けた心臓移植手術の経験以降、ナンシーは『コルプス』(1992年)や『侵入者』(2000年)など独自の身体論も発表するようになる。思考論と身体論という並走するこれら二つのテーマのあいだにはいったいいかなる関係があるのだろうか。この点を明らかにするモチーフのひとつが「眠り」である<sup>2)</sup>。2007年に公刊された『眠りの落下』は、眠りという身体的・生理的な必要性が人間の思考といかなる関係にあるのかを探究する試みだといえる。ある対談において質問者がナンシーに対して述べているように、眠りが「哲学によって長いあいだ顧みられなかったテーマ」であり、「哲学は眠りと距離を取り、身体の休息や魂の夜に眠りを閉じ込めてきた」<sup>3)</sup>とまで言い切れるかは詳細な検討を要するだろうが、夢ではなく眠りに力点を置くナンシーの試論がさまざまな分野から注目を集めたことはまちがいない<sup>4)</sup>。そこで本稿では、眠りと思考の関係に焦点を絞って『眠りの落下』の議論の核心を取り出すことを試みてみたい。その結果、眠りがリズムと密接に結びついているということがみえてくるだろう。ナンシーの哲学におけるリズムの重要性は、この哲学者が「トーン」といった音楽的要素や「心臓」の鼓動に並々ならぬ関心を抱いていることからわかるが、眠りをめぐる試論の鍵となっているのもまたリズムなのである。眠りとリズムのあいだにはどのような関係があり、それが思考とどう結びついているのだろうか。本稿が目指すのは、『眠りの落下』というテクストを読み解くことで、最終的にこの問いに一定の結論を出すことである。

## 1. 思考していないことをどうすべきか——アーレントから出発して

ナンシーのテキストへと向かう前に、まずはハンナ・アーレントのアイヒマン論を確認しておくことにしたい。アーレントが論じた「悪の凡庸さ」や「思考していないこと」は、20世紀後半以降の哲学に多大な影響を与え、いまでも思考について考える際のひとつの指標となっている。幾度も引用され人口に膾炙したものはあるが、アーレントが述べた思考の欠如にどう応答すべきかという問いは、いまだその重要性を失っていないだろう。それゆえ、ナンシーの思考論を検討するにあたって、その大前提としてアーレントの『エルサレムのアイヒマン』（1963年）を検討するところから始めよう。もちろん真っ先に引用すべきは次の有名な箇所である。

彼は愚かではなかった。まったく思考していないこと〔thoughtlessness〕——これはけっして愚かさと同じものではない——こそが、彼をあの時代の最大の犯罪者のひとりにしたのである。こうしたことが「凡庸」であり滑稽でさえあるとしても、またアイヒマンから残忍であったり悪魔的であったりするような底知れなさを引き出すことがどうしてもできないとしても、やはりこれはけっしてありふれたことではない。死に直面した人間が、しかも絞首台の下で、これまでに葬式で耳にしてきた言葉のほか何も考えられず、こうした「高貴な言葉」が自分自身の死という現実を完全に覆い隠してしまうなどということは、まちがいがなくそうあることではない。このように現実から乖離し〔remoteness from reality〕思考していないことは、人間のうちにおそらく潜んでいる悪の本能のすべてを挙げてかかったよりもすさまじい猛威をふるうことがある——これこそが実際にエルサレムで学びえた教訓だった<sup>5)</sup>。

アーレントがアイヒマンの特徴として述べる「思考していないこと」とは、

どのような事態なのだろうか。現在のアーレント研究が示すところによれば、それは決まり文句の使用によって他者への想像力を欠如させることである<sup>6)</sup>。上の引用で言えば、絞首台まで進んだアイヒマンが、本来は死者を送る側の人間が弔辞として述べるはずの言葉を口にするという奇怪な状況がそれにあたる。アイヒマンのようなクリシェしか発することのできない人間の言葉は現実から乖離し、言葉だけが上滑りしていく。そうした言葉があふれかえるとき、現実が起こっていることがいかに悲惨であろうとも、言葉はそれ自体で完結して現実と関係を結ばなくなってしまう。アーレントが「思考していないこと」という表現によって述べようとした言葉と現実のこうした関係の問いは、視野を広げてたとえば石原吉郎やパウル・ツェランのような詩人のことも考えれば、ホロコーストやシベリア抑留といった言語を絶するような20世紀の現実がもたらした問いとみることもできるだろう<sup>7)</sup>。第3節で見るナンシーもまた、1940年生まれであるとはいえ、その活動の出発点となる論考において、アルジェリア戦争後のフランスでの言葉と現実の関係について問うていた<sup>8)</sup>。

このように、アーレントが「思考していないこと」という言葉で語った言語と現実の関係は、人間が置かれた状況と言語の関係を問う多くの思想家や作家に共通する問いだが、それでは決まり文句の反復に対してはどのように向き合えばよいのだろうか。アーレント自身は、未完に終わった『精神の生活』で、「思考の活動そのものは、結果や特殊な内容に関係なく、出来事や注意を引く事柄を何でも吟味する習慣のことだが、こうした活動は悪をおこなうことを抑制する条件のひとつになりうるだろうか、実際に悪を為さないようにと人間を「条件づける」ことは可能なのだろうか<sup>9)</sup>と問い、思考が悪を防ぐ条件になりうるかという問いを立てている。もちろん、決まりきった言葉を発するのではなく現実に対してその都度ふさわしい言葉を自分自身の力で探して思考することは、アイヒマンのように上滑りするクリシェに身を委ねないためには必要だろう。しかし、人間はつねにそのように思考し

つづけることができるのだろうか。アーレントも述べているように、「思考する自我が現れるのは一時的でしかない」<sup>10)</sup> のであれば、思考しつづけることは人間にとってきわめて困難で、ある意味では不可能なことでもある。この難しさは、本稿の冒頭で提起したように、日々くりかえされる睡眠と思考の関係を考えてみてもすぐにわかるだろう。当然、ひとは眠っているあいだ、覚醒時と同じようには思考していない。ゴヤのエッチングのタイトルのように、「理性の眠りは怪物を生む」と考えるならば、眠りと思考は相容れないものなのかもしれない。しかし、人間が身体をもつ存在である以上、睡眠というこの生理的必要性から逃れられないこともたしかだ。

アーレントに即してこうした身体的必要性と思考の関係を探究するには、『人間の条件』などの著作で展開された〈公／私〉の区分を再検討する必要があるだろうが<sup>11)</sup>、私たちはここでアーレントを離れ、睡眠の必要性を減らすという発想へと目を向けてみよう。もし眠りと思考が相反するものであるとしたら、思考しつづけるために眠らないということはひとつの選択肢になりうるだろう。実際、「ミネルヴァのふくろうは夕暮れに飛び立つ」とヘーゲルが述べたように、「西洋＝日没 (Occident)」の哲学にとって夜通し警戒を怠らないことはいわばその使命だった。とはいえ、いまや眠らないことは、資本主義に覆われた世界全体に課された命法なのではないか。そのように問うているのが、次節で見えていくジョナサン・クレーリーである。

## 2. 「オフ」を欠いた世界——クレーリー『24/7』について

『観察者の系譜』や『知覚の宙吊り』といったすでに古典的ともいえる地位を獲得した著作において視覚をめぐる独自の議論を展開してきたクレーリーが2013年に刊行した『24/7』は、タイトルのとおり24時間週7日開店営業状態の世界に批判的に迫った著作である。日本語訳の副題がいきみじくも言い表しているように、「24/7」が常態となった世界とは、「眠らない社会」

にほかならない。『24/7』の冒頭を飾るミヤマシトドという渡り鳥に関する印象的な記述は、まさにこの「眠らない」というテーマを象徴している。ミヤマシトドは、七日間にもわたって眠らずに飛びつづけることができる鳥であり、アメリカ国防総省がその脳活動についての研究を援助しているというのだ。このエピソードが示しているのは、アメリカの軍隊において目指されているのが「睡眠に対する身体的要求を減退させる」<sup>12)</sup> という、いわば人間の脱身体化であり、そのための鍵を眠りが握っているということである。しかし、これは軍隊にのみ関わることではない。クレリーが述べるように、「眠らない兵隊は、眠らない労働者や眠らない消費者の先駆けになる」<sup>13)</sup>。

事実、『24/7』が照準を定めているのは、眠りと資本主義の関係であり、とりわけ「注意経済 (attention economy)」が議論のひとつの焦点となっている<sup>14)</sup>。1990年代後半に提唱され始めた「注意経済」の要点とは、情報のあふれかえった社会においては、人間が向ける「注意」が経済的価値をもつようになるということにあった。しかし、身体をもった人間が向けられる「注意」には限りがあるため、一方では企業による「注意」の奪い合いが生じ、他方では何か重要な情報を見逃してしまったのではないかという恐怖(「FOMO (Fear Of Missing Out)」)が個々人のなかに芽生えることとなる。言うまでもなく、「注意」の総量に限界を設け、人間を有限な存在たらしめている最たるものこそ、睡眠にほかならない。それゆえにクレリーは次のように述べるのである。

睡眠は、生産時間と流通と消費において計り知れないほどの損失をもたらす、まったく無用で本来的に受動的なものであるという点で、24/7の世界の要求にはつねに適合しないだろう。睡眠に費やされる人生の莫大な部分は、シミュレートされた必需品の泥沼から逃れているため、現代資本主義の飽食に対する公然たる侮辱のひとつでありつづけている。睡眠は、資本主義によって私たちから時間が奪い取られることに対する断

固とした妨害なのである。人間の生にとって見たところ削減できない必要性のほとんどすべて——飢え、渇き、性的欲望、近年は友情に対する欲求など——が、商品化され金融化されたかたちでつくり直されているが、睡眠は、植民地化されたり抑制されたりできない人間の欲求や休止期間という理念を、利潤の巨大エンジンに突きつけるため、グローバルな現在における不都合な例外や危険な場所でありつづけている<sup>15)</sup>。

睡眠は、資本主義にとっての有用性の外部、資本主義にとっての非有用な部分である。それゆえに、睡眠という人間の有限性を取り払いたい、睡眠時間という足枷を外したいという欲望が生じてくるのであり、その先に待ちかまえているのが「24/7」の眠らない世界なのである。それでは、このように睡眠時間が削り取られていくことには、どのような意味があるのだろうか。重要なのは、眠りの剥奪がリズムの剥奪であるということだ。そもそも睡眠とは、覚醒という「オン」の時間に対する「オフ」の時間であるが、眠らない世界においては「オフ」の時間が原理的に存在しなくなってしまう。身体をもつ人間は、睡眠と覚醒をくりかえすことによって「オン」と「オフ」を交互に反復しつづけており、その点でリズム的存在だと言っても過言ではない。しかし、「24/7」の世界においては、そうした「人間の生のリズムカルで周期的な感触」<sup>16)</sup>が欠落していくのである。クレーリーは、デバイスのスタンバイ状態を示すために「スリープモード」という表現が用いられることに強い危惧を示しているが<sup>17)</sup>、それは〈オン／オフ〉というリズムが乱され、眠りが「オン」のヴァリエーションにされてしまうからである。いわば、「24/7」の世界とは、〈オン／準オン〉しかない「オフ」を欠いた世界なのだ。

このように眠りをリズムとして理解し、現代を眠りが剥奪された世界として認識することは、実はナンシーが『眠りの落下』で述べていることでもある。また、「眠る者はまどろみにおいて個人を脱して共通の〔in common〕世界に住み、悲惨な無と浪費にほかならない24/7にわたる実践から立ち去ると

いう活動を共に演じる」<sup>18)</sup>と述べるクレーリーの見通しは、ナンシーの次のような言葉と響きあっているようにも思える。

眠ること自体は、万人に共通の〔commune〕尺度である等価性しか知らず、いかなる逸脱も格差もゆるさない。眠る者はすべて、同じ眠り、同一かつ一様な眠りに落ちていくのだ<sup>19)</sup>。

次節で見ると、ナンシーの場合には、「共通」のものである眠りは事後的にしか捉えられない。その点で、クレーリーの述べているところよりもいくぶん複雑な様相を呈してはいるが、眠りを分かち合われた何らか「共通の」ものとみなす発想は両者に共通しているだろう<sup>20)</sup>。こうした点を踏まえると、『24/7』に『眠りの落下』への言及がないことはいささか不可解ではある。ナンシーの著作がフランス語で出版されたのが2007年であり、2009年には英訳も刊行されていることを考えると<sup>21)</sup>、『24/7』が刊行された2013年の時点でクレーリーが『眠りの落下』の議論を知らなかったとは考えがたい。クレーリーによって眠りについての思考の先駆者として名が挙げられているのはブランショ、メルロ＝ポンティ、ベンヤミンであり<sup>22)</sup>、ナンシーについては註で『無為の共同体』が言及されるにとどまっている。もちろん、ナンシーが語る「露呈 (exposure)」を「脆弱性＝可傷性 (vulnerability)」とパラフレーズするクレーリーの立論が興味深いものであることはまちがいない<sup>23)</sup>。そうであれば、なぜクレーリーは『眠りの落下』に触れなかったのだろうか。こうした疑問は残るにせよ、両者の議論が複数の点で似た方向を向いているという事実は、眠りについて思考すべき争点が二人の思想家が共通して語っている点にあるといえるだろう。それゆえ次節では、もう一度ナンシーの言葉に即して、世界から眠りが奪われていること、眠りがリズムと結びついていることを確認していきたい。



### 3. 眠りと思考のリズム——ナンシー『眠りの落下』について

ナンシーもまた、現代の世界において眠りが奪われていると述べ、クレリーほど直接的な仕方ではないにせよ、それが資本主義と関係していることを示唆している。たとえば、次の一節を見てみよう。

眠りは夜によって生み出される。夜がなければ、眠りが存在する理由はなくなってしまうだろうし、生命体は永続する昼間のなかで消耗することなく活発に働きつづけるようなかたちで組織されることだろう。それゆえにそもそも、夜を占拠し、労働によって夜を覆い尽くすということは、生産システムの強迫観念なのである。作業班は鎖につながれ、照明が整えられ、夜という宙吊りの時間は追い払われ、日がふたたび落ちることはなくなる。非等価なものと同価なもののリズムが抹消されるのだ<sup>24)</sup>。

生産性を第一の目標とするような世界においては、労働者は夜通し働かされ、睡眠を奪われていく。そこに現れるのは、夜がなくなり昼が永続する世界、昼が常態であり規則となった世界である。このような見通しは、夜であつてもつねに煌々と光が輝く「24/7」の世界と同様のものだろう。ナンシーにおいてもまた、このような世界において失われるのはリズムにほかならない。「今日の世界は、眠りも覚醒もない状態にあるのかもしれない。[...] それは、リズムを奪われた世界、リズムなしで済ませてしまう世界である」<sup>25)</sup>とも述べられているように、眠りを奪われることはリズムを奪われることに等しい。これまでも述べてきたように、人間は眠りと覚醒を交互にくりかえすことによって生きており、このリズムは身体をもった人間の生と切り離すことができない<sup>26)</sup>。また、『眠りの落下』の節題ともなっているフランス語の「berceuse」という語が、「子守歌」も「揺り椅子」も意味するように、リ

リズムは人間に眠気をさそうものでもある。ほかにもたとえば、人間の生を象徴するような心臓の鼓動もまたリズムであり（心臓移植を経験したナンシーにとって鼓動のリズムは重要なモチーフである）、目のまばたきも視覚にオフの切れ目を入れるという点でリズムだといえよう<sup>27)</sup>。このような人間のリズムを狂わせるのが、眠りを奪う世界なのである。そして、眠らせないということが拷問の手段のひとつであることを考えると、このような世界のあり方がいかに暴力的なものかわかるだろう。

以上のことを、少しちがった角度から見てみたい。夜が消え、人工的な光によって昼が夜を侵食するような世界において消え去るのは、昼と夜の「交替」である。

夜があるためには、昼がなければならぬ。昼は、みずからに固有な差異として、昼夜の交替〔alternance〕として夜を導き入れる。この交替によってのみ、昼は光＝一日〔*jour*〕でありうる——すなわち、光であると同時に周期であることができるのだ。それは、二重の打ち切りであり交替である——光と闇の打ち切り・交替であり、継起する時間の単位という打ち切り・交替でもある。それは、太陽と月、覚醒と睡眠という二重のリズムだ<sup>28)</sup>。

昼が永續するような世界では、夜がなくなるだけでなく、一日という時間の単位が意味をなくしてしまう。もともと一日という単位は、昼と夜の周期性から成り立っているように、くりかえしによって継起するリズムカルなものである。このような昼夜の周期的な入れ替わりを、ナンシーは「交替」という語で言い表している。昼夜の「交替 (alternance)」とは、みずからとは異なる他なるものへの移行、つまり「他化 (altération)」ともいえる<sup>29)</sup>。「差異」によって、他なるものへと移り変わっていくことこそリズムという事象が指しているものなのである。それゆえ、昼しかない世界とは、「差異」の

ない世界、一様なのっぺりとした同一性の世界であり、いわば生産性というシステムが（いかにそれが一見すると「フレキシブル」で動的な様相を呈そうとも）閉域を形成する世界だといえるだろう。

こうした観点からすれば、〈覚醒／睡眠〉という交替運動において重要なのは、眠っている状態というよりも、覚醒が眠りへと変化することである。ナンシーの著作が「眠りの落下」と題されている理由もここにあり、眠りに落ちるという契機こそが問われなければならない。それでは、覚醒と眠りのあいだで生じる「落下」とは、どのようなものなのだろうか。ナンシーの言葉を引いてみよう。

問われているのは、〈二つのあいだ〉である。これがなければ、いかなる現実も生じない〔…〕。間隔が現実を別の何らかの現実から分離するのだ。つまり、それら二つの現実に通の非起源の拍動そのものにしたがって、それらの現実を区別するとともに互いに関係づけるのである<sup>30)</sup>。

「落下」とは、覚醒と睡眠という二つの状態の「あいだ」にはかならない。このような「あいだ」によって、覚醒と睡眠という異なる状態は分離され、区別される。そうであれば、「落下」という「あいだ」の契機は、〈覚醒／睡眠〉という対を成り立たせるものであるとともに、両者が共有する起源ともいえるかもしれないが、日常的な経験からわかるように、眠りに落ちたということは覚醒してからでないと確かめることができず、また目覚めるということも「目覚めた」という過去形でしか語ることができない。つまり、覚醒から眠りという方向であれ、眠りから覚醒という方向であれ、敷衍をまたぐ運動がそのものとして捉えられることはないのである。これら二つの状態を越境する運動そのものは、事後的にしか把握されえないということだ。そのため、ナンシーはこの運動を「二つの現実に通の非起源の拍動」と表現し

ている。人間が日々くりかえす睡眠と覚醒の交替は、このような起源ならざる起源としての越境運動であり、それによって人間の生のリズムが形成されてくるのである。

それでは、このような睡眠と覚醒の交替によるリズムは、思考とどう関係しているのだろうか。さしあたり、思考を覚醒時におこなわれる行為と解するならば、思考しつづけることは覚醒状態を維持することにほかならない。しかし、これまで見てきたように、覚醒しかない世界とは、生産性の論理に飲み込まれた閉域を形成するものだった。したがって、思考しつづけて眠らないことは、概念の労働を夜通しつづけることだといえるだろう。ナンシーが提示するのは、そうした不寝番としての思考ではない思考のかたちである。

理性の眠りが怪物を生み出すということがつねに真理であるとしても〔…〕、思考の実直さが完全に発揮されうる最後の日に思考が目覚めるのは、思考が眠りや夢やもはや目覚めない可能性との関係のなかに置かれているからだということもまた真理なのである<sup>31)</sup>。

思考は眠りとの関係のなかで捉えられなければならない<sup>32)</sup>。あえてナンシーの述べているところを大幅に切り詰めてまとめるならば、このようになるだろう。したがって、誰も一度は考えたことがあるにちがいない、睡眠時間を削って働いたり思考したりするという発想は、眠りと思考の関係性を見誤っているといえる。思考を眠りから切り離し、思考そのものの持続を追求するとしたら、そのときにはもはや眠りと思考のあいだにあるはずのリズムが存在しなくなってしまう。そして、リズムが欠けているということは、覚醒と眠りのあいだの敷居をまたぐことによる他化や差異化の契機が失われているということにほかならない。眠りとの関係というリズムのなかで思考を捉えることによって、はじめて思考がさらに先へと進んでいくさまを理

解することができるのである（「実直さ」と訳したフランス語 « probité » は、語源的には「まっすぐに伸びる」ことを意味している）。

しかし、そもそもなぜ思考は眠りによって変化していくのだろうか。これまで見てきた覚醒と眠りのあいだの関係は、「落下」というモチーフと関連して、「緊張」と「弛緩」の関係とも言い換えられている。ナンシーによれば、眠りに落ちることは、緊張した覚醒時の状態から眠りという緩んだ状態へと移ることであり、このように緩み落ちていく先には「内奥（intimité）」と呼ばれる場がある<sup>33)</sup>。キルケゴールをめぐる別の対談において、「内奥」という独特な内部は、アウグスティヌスの「私の最も内なるところよりさらに内」という言葉と結びつけられて次のように説明されている。

キルケゴールが引用しているかは知りませんが、問題なのは、アウグスティヌスの「私の最も内なるところよりさらに内 [interior intimo meo]」という言葉なのです。アウグスティヌスの神は、表象——簡潔に、偶像崇拜的な表象と言っておきましょう——に関係づけられる必要がありません。その神性は、「最も内なるところよりさらに内」（そして「最も高きところよりさらに高き」）にあります。つまり、その神性は、「内」の極点そのもの（intimum [最も内なる]、つまり intus [内なる] の最上級）に対する過剰にあるのです。ということは、「最も内なるもの [intimum]」は、いまだあらゆるものから解き放たれてはいないといえます。「私」の最も深いところにおいても、「最も内なるもの」はまだ自己に密着したままです。しかし、「さらに内 [interior]」となると、それはもはや自己に密着してはいません。「さらに内」とは、絶対なのです<sup>34)</sup>。

『告白』において神と出会う場として語られた「私の最も内なるところよりさらに内」を、ナンシーは自己の把握を逃れる過剰な部分、つまり自己の内なる他性と解釈する。「内部」の最上級に比較級を付して、内へと向かう

運動を倍加させたような仕方では語られる内部とは、自己の内でありながら自己によっては制御されえない部分であり、眠りはまさにそのような意味での「内奥」へと落ちていくのである。「内奥」は、自己がみずからに属するものとして所有できるようなものではなく、何にも属さず誰にも所有されないものであるがゆえに、「あらゆるものから解き放たれている」という語源的な意味での「絶対 (absolu)」としても特徴づけられる。そして、対談において「特異性とは、先ほど言った意味での絶対です」<sup>35)</sup>とつづけて述べられているように、「内奥」という場合は、1980年代以降ナンシーが共同体論とともに練り上げてきた「特異性 (singularité)」という概念とも結びついている。ナンシーが語る「特異性」はさまざまな側面をもつ多面的な概念であるため詳細な分析を要するが、最低限押さえておくべきは、『無為の共同体』(1986年)以来、「特異性の分有」<sup>36)</sup>バルタージュこそがナンシーの共同体論の要点であるということだ。それゆえ、クレーリーが示唆しているような、眠りを「共通の世界」とする視座は、ナンシーの共同体論と大まかな方向性としては一致している。

とはいえ、眠りに落ちたことが目覚めてからしか認識できないように、「内奥」も「特異性」もそのものとしては捉えられず、つねに事後的にしか把握することはできない。「内奥」や「特異性」は、どのようにしても昼の世界からしかアクセスすることができないため、つねに覚醒した意識によってなかったものにされてしまう危険をとまなっている。それでもなお、思考に他なるものが導き入れられるとしたら、それは昼の思考の制御下に置くことのできない「内奥」や「特異性」と踵を接するかぎりでのことであり、昼と夜の交替というリズムカルな関係性を無視しないかぎりでのことなのである。こうした覚醒と眠りに切れ目を入れるリズム自体は、眠りに落ちることも目覚めることも意識的におこなうことのできる行為ではない以上、自己のコントロール下にあるものではない。しかし、そうした制御しえないリズムカルな越境運動を受けいれないかぎり、思考は覚醒状態のなかで平板化し自閉し

ていってしまう。つまり、もし思考をさらに先へと進めようとするのであれば、自己の権能の及ばない領域を引き受ける必要があるということだ。ナンシーにとって、そうした領域の最たるものこそ身体のリズムと密接に結びついた眠りだったのである。

## おわりに

眠らずに活動しつづけたい、睡眠時間を削ってでも活動をつづけたいという欲望は、睡眠が身体の欲求に根ざした快であるとしても、生産を価値とする社会の人間にとっては本質的なものかもしれない。少なくとも、ナンシーやクレリーの眠り論が示しているように、これを使役のかたちにした欲望（眠らずに活動させつづけたい）は、現代の世界の支配的な一側面を示している。たしかに、こと思考に関しては、それを長期にわたって持続することはときに苦痛をとまなう。手近なクリシェに頼ってしまうほうが楽なことも多い。だからといって、思考することの大切さや考えつづけることの意義を説くだけでは十分ではない。そこでは、人間の生の根本的な部分が見落とされているかもしれないからだ。

アーレント、クレリー、ナンシーという三人のテキストを繙くことによって本稿が示したのは、人間の思考が眠りとの関係のなかにあるということ、思考は眠りとのリズムカルな交替運動のなかにおいて捉えられるべきだということである。眠りは、眠る自己によってもコントロールできない領野であるとともに、覚醒から眠りへ、眠りから覚醒へという閾を通過する特異な運動にほかならない。ひとが眠るかぎり、覚醒時の思考はこうした制御不可能なものとともにあることしかできないのである。にもかかわらず、そのようなコントロール不可能なものをなくし、すべてを光のもとに置こうとするならば、そうした態度は結局のところ眠りを侵食することで、誰によっても所有されえない特異性を抹消し、あらゆるものを生産性や有用性という尺

度ではかることになっていく。そうした世界がいかに暴力的であるかは、クレラーの著作を読まずとも、私たちの周囲に目を向ければ容易に見て取ることができるだろう。そのような世界においては、眠りを奪われないことこそが抵抗となる。ぐっすりと眠り、それによって眠りと思考のリズムを保つとき、思考はさらに遠くへと進んでいくにちがいない。

## 注

- 1) 本稿は、2021年3月27日に立命館大学で開催された、立命館大学間文化現象学研究センター×東京大学共生のための国際哲学研究センター(UTCP)シンポジウム「ひとはいかにして思考するのか?——バタイユ、ブランショ、ナンシー」での発表「眠りとボーっとすること——ナンシーにおける思考とリズム」をもとにしたものである。シンポジウムの登壇者、関係者ならびに質疑応答において貴重なご指摘をくださった方々に感謝申し上げる。なお、本稿はJSPS科研費20J00020の助成を受けたものである。
- 2) 二つのテーマをつなぐもうひとつの代表的なモチーフは「重さ(poids)」である。これについては、『思考の重さ』(1991年)を中心に読み解く必要があるが、本稿では扱うことができない。
- 3) Jean-Luc Nancy, « Entretien avec Nicolas Duten » in *Un trop humain virus*, Bayard, 2020, p. 92. [『あまりに人間的なウイルス——COVID-19の哲学』伊藤潤一郎訳、勁草書房、2021年、99頁]

以下で引用する訳文は既訳を参照しつつ、引用者が文脈に合わせて新たに訳出した。強調はすべて原著者によるものである。引用文中の／は、原文で段落が変わっていることを示している。

- 4) たとえば、「眠りが示すのは自己の消失、埋没、逃走でしかない以上、眠りの現象学など存在しない」(Jean-Luc Nancy, *Tombe de sommeil*, Galilée, 2007, p. 31 [『眠りの落下』吉田晴海訳、イリス舎、2013年、22-23頁])というナンシーの主張に対する、フッサール現象学の立場からの論考として次を参照のこと。Nicolas de Warren, “The Inner Night : Towards a Phenomenology of (Dreamless) Sleep,” in Dieter Lohmar & Ichiro Yamaguchi (eds.), *On Time : New Contributions to the Husserlian Problem of Time-Consciousness*, Springer, 2010, pp. 273-294. また、とりわけ注目すべきは、ナンシーの眠り論がアーティストからの応答を引き起こしていることだろう。眠りをテーマにさまざまな作品を発表しているヴィルジル・ノヴァリナが2016年に監督した映画『眠りのさなかに』では、ミシェル・ピュートル、クレマン・ロッセ、ピエール・パシエのテキストとともにナンシーの『眠りの落下』が読み上げられている(Virgile Novarina,



*Au cœur du sommeil*, A.p.r.e.s Production, 2016)。ほかに、ナンシーは2018年にトロント大学美術館で開催された眠りをめぐるプログラムに招待され、「ぐっすり眠る (Sleep Well)」という映像作品を発表している。https://vimeo.com/264313896 (最終閲覧日：2021年9月3日)

- 5) Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem : A Report on the Banality of Evil*, Penguin Classics, 2006, p. 287-288. [『エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告 [新版]』大久保和郎訳、みすず書房、2017年、395頁]
- 6) 三浦隆宏「アイヒマン裁判——「悪の凡庸さ」は論駁されたか」(日本アーレント研究会編『アーレント読本』、法政大学出版局、2020年、103 - 112頁)を参照のこと。
- 7) 石原吉郎は、「沈黙と失語」(1970年)において強制収容所での言葉について次のように述べている。「言葉がむなしいとはどういうことか。言葉がむなしいのではない。言葉の主体がすでにむなしいのである。言葉の主体がむなしいとき、言葉の方が耐えきれずに、主体を離脱する。あるいは、主体をつつむ状況の全体を離脱する。私たちがどんな状況のなかに、どんな状態で立たされているかを知ることには、すでに言葉は無関係であった。私たちはただ、周囲を見まわし、目の前に生起するものを見るだけでたりる。どのような言葉も、それをなぞる以上のことはできないのである」(『沈黙と失語』、『石原吉郎全集Ⅱ』、花神社、1980年、32頁)。石原が語っているのは、個々の主体の介入をまったく許さないような状況が現実となったとき、現実を言葉によって意味づけるという行為が無意味になるということである。アーレントとはちがった仕方ではあるが、ここに見られるのもまた言語と現実が乖離していくひとつのあり方だろう。それに対し、戦後のパウル・ツェランは言葉が現実と関係を結ぶことにかすかな希望を託している。「ハンザ自由都市ブレーメン文学賞受賞の際の挨拶」(1958年)で、ツェランはこう語る。「もろもろの喪失のなかで、ただ「言葉」だけが、手に届くもの、身近なもの、失われていないものとして残りました。／それ、言葉だけが、失われていないものとして残りました。そうです、すべての出来事にもかかわらず。しかしその言葉にしても、みずからのあてどなさのなかを、おそるべき沈黙のなかを、死をもたらす弁舌の千もの闇のなかを来なければなりません。言葉はこれらをくぐり抜けて来て、しかも、起こったことに対しては一言も発することができませんでした、——しかし言葉はこれらの出来事のなかを抜けて来たのです。抜けて来て、ふたたび明るいところに出ることができました——すべての出来事に「豊かにされて」。／それらの年月、そしてそれからあとも、わたしはこの言葉によって詩を書くことを試みました——語るために、自分を方向づけるために、自分の居場所を知り、自分がどこへ向かうのかを知るために。自分に現実を設けるために」(Paul Celan, „Ansprache anlässlich der Entgegennahme des Literaturpreises der Freien Hansestadt Bremen“, *Gesammelte Werke*, Bd. 3, Suhrkamp, 1983, S. 185-186. [「ハンザ自由都市ブレーメン文学賞受賞の際の挨拶」、『パウル・ツェラン詩文集』飯吉光夫編訳、白水社、

- 2012年、101頁）。引用箇所のとど述べられているように、ツェランにとって言葉が生み出す現実とは、「語りかけることのできるあなた」というある種の二人称だった。こうした二人称への差し向けに、言葉と現実の関係を結びなおす可能性を見ることは、ナンシーの哲学にも通じるところがある。ナンシーは二人称を重視する哲学者だが、その特徴は二人称が「誰でもよい」という不定の人称と切り離せないところにある。この点については、拙著『ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称』（人文書院、近刊）を参照されたい。
- 8) ナンシーの最初の公刊論考「ある沈黙」（1963年）では、次のように述べられていた。「もはや私たちの言語は現実の媒介ではない。というも、私たちの言語は現実の全体を直接的に私たちに届けるからだ（もちろん私たちの言語は、あらゆる言語に具わっている媒介性を排除したのではないが、近代的意識に対してはあたかも媒介性を排除したかのように現れるのだ。象徴的なものが消え去っていく……）」(Jean-Luc Nancy, « Un certain silence », *Esprit*, n° 316, avril 1963, p. 558)。
- 9) Hannah Arendt, *The Life of the Mind*, Harcourt Brace & Company, 1981, p. 5. [『精神の生活（上）——第一部 思考』佐藤和夫訳、岩波書店、1994年、8頁]
- 10) *Ibid.*, p. 53. [同書、63頁]
- 11) 議論を先取りすることになるが、ナンシーの眠り論を踏まえれば、リズムとしての眠りはたんなる画一的な身体的必要性とみなすことはできない。この点に関しては、アレントの公的領域と私的領域の区別を、「身体の複数性」、「ゾーエー（生物的な生）の複数性」という観点から論じる次の論考が非常に示唆的である。山本圭「来たるべき公共性——アレントの身体とゾーエーの複数性」、『アンタゴニズムス——ポピュリズム〈以後〉の民主主義』、共和国、2020年、121-151頁。
- 12) Jonathan Crary, *24/7: Late Capitalism and the Ends of Sleep*, Verso, 2013, p. 2. [『24/7——眠らない社会』岡田温司監訳、石谷治寛訳、NTT出版、2015年、5頁]
- 13) *Ibid.*, p. 3. [同書、6頁]
- 14) ここでは、本稿に必要な範囲でしか「注意経済」について扱うことができない。『24/7』でのクレリーの議論と「注意経済」の関係についてより詳しくは、訳者の石谷治寛の解説「不眠社会、注意経済、そして東京の夜——訳者解説」（前掲『24/7』、170-198頁）を参照のこと。
- 15) Crary, *24/7*, p. 10-11. [『24/7』、15 - 16頁]
- 16) *Ibid.*, p. 9. [同書、13頁]
- 17) Cf. *Ibid.*, p. 13. [同書、19頁]
- 18) *Ibid.*, p. 126. [同書、159頁]
- 19) Nancy, *Tombe de sommeil*, p. 36. [『眠りの落下』、29頁]
- 20) すでに監訳者の岡田温司が、クレリーの思考とナンシーやブランショらの共同体論との関係を示唆している。「怒るクレリー——監訳者あとがきにかえて」、前掲

『24/7』、203 頁。

- 21) Jean-Luc Nancy, *The Fall of Sleep*, translated by Charlotte Mandell, Fordham University Press, 2009.
- 22) Cf. Crary, *24/7*, p. 24. [『24/7』、33 頁]
- 23) Cf. *Ibid.*, p. 21. [同書、28-29 頁]
- 24) Nancy, *Tombe de sommeil*, p. 43. [『眠りの落下』、38 頁]
- 25) *Ibid.*, p. 72. [同書、67 頁]
- 26) リズムが身体と関係するとはいえ、それが自己の身体にのみ由来していると考えことはできないだろう。いわばリズムが他者から与えられる可能性を検討する必要があるが、本稿では扱うことができないため、さしあたりパスカル・キニャールの次の言葉を参照されたい。「身体のリズム、心臓のリズム、次に泣きわめき呼吸するリズム、空腹を訴え叫ぶリズム、運動と片言のリズム、さらに言語のリズム、それら複数のリズムの併存は、自然発生的にもみえるが後天的に獲得されるものでもある。個人の意志で引き起こされるというより、これらのリズムは模倣によって獲得され、その習得は伝染による」(Pascal Quignard, *La haine de la musique*, Gallimard, coll. « folio », 1997, p. 109 [『音楽の憎しみ』博多かおる訳、水声社、2019 年、77 頁])。
- 27) つまり、人間は覚醒時でさえ四六時中目を見開いておくことができない。こうした人間の視覚の特性が、1 秒間 24 コマの静止画からなる映画カメラと類似していることも指摘されている。「映画カメラが外界を間歇的なリズムにおいて捉えるという、その作業のやり方は、非人間的で機械的というよりも、きわめて有機的で生命的なものだとさえ言えるのである」(長谷正人『映像という神秘と快楽——〈世界〉と触れ合うためのレッスン』、以文社、2000 年、147 頁)。
- 28) Nancy, *Tombe de sommeil*, p. 40. [『眠りの落下』、34 - 35 頁]
- 29) 一般に « altération » というフランス語は、通常の状態から悪い状態への移行を指すが(この場合「悪化」、「変質」といった訳語が当てられる)、語源的には「他性 (altérité)」や「他なるもの (autre)」と同じであり、ナンシーのテキストにおいては「他なるものになる」という意味で用いられることが多い。バタイユとナンシーから大きな影響を受けつつ「他化」という概念を論じたものとして、ボヤン・マンチェフの次の著作を参照のこと。Boyan Manchev, *L'altération du monde : Pour une esthétique radicale*, Lignes, 2009. [『世界の他化——ラディカルな美学のために』横田祐美子・井岡詩子訳、法政大学出版局、2020 年]
- 30) Nancy, *Tombe de sommeil*, p. 63. [『眠りの落下』、56 - 57 頁] 〈 〉 は原文にはなく、意味のつながりを明確にするために訳者が補ったものである。
- 31) *Ibid.*, p. 82. [同書、79 頁]
- 32) 注意しておきたいのは、ナンシーは「目覚めた状態での夢」や「昼日中の眠り」といった表現も用いており、『眠りの落下』における「眠り」には、いわゆる「ボーっとす

る」ことも含まれているということである。この点に関しては、ナンシーが論じられているわけではないが、眠りと覚醒をめぐる次の研究を参照のこと。塚本昌則『目覚めたまま見る夢——20世紀フランス文学序説』、岩波書店、2019年。

- 33) Cf. Nancy, *Tombe de sommeil*, p. 14. [『眠りの落下』、6頁]
- 34) « En chute libre à l'infini, entretien avec Jean-Luc Nancy » in *Kierkegaard en France : Incidences et résonances*, sous la direction de Florian Forestier, Jacques Message et Anna Svenbro, BnF, 2016, p. 133. [「キルケゴール——ジャン＝リュック・ナンシーへの問い」伊藤潤一郎訳、『人文学報 フランス文学』、第513巻15号、首都大学東京人文科学研究科、2017年、8頁]
- 35) *Ibid.*, p. 133. [同書、11頁]
- 36) Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, 3<sup>e</sup> éd., Christian Bourgois, 1999, p. 70. [『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001年、50頁]